



『フィリピンの小さな産院から』

評者・竹内 正人 東峯婦人クリニック副院長、産科医師

本書は、本誌の連載「バルナバクリニック発ぶつづつ通信」をまとめたものである。フィリピンで貧しい人々に寄り添って生きてきた富田の13年は、共感できても、できなくとも、圧倒的なリアリティーを伴って、読者の心をあらゆる角度から大きく揺さぶることだろう。

1997年、夫の植林事業(NPO)に付き添って、ピナツポ火山噴火の被災民に開かれた再定住地に移り住んだ富田は、多くの貧しい人々がお産で命を落としていて、その一因が、産婆や助産師の間違った知識による処置の横行にあることを知る。そんな時、富田は友人2人に自宅出産を頼まれたが、当時生後2か月の次女がいたため断った。2人は近所の助産師を自宅に呼び、赤ちゃんはともに亡くなった。「神様が決めたんだから仕方がない」と、現地の人のように納得できなかった富田は、2000年、藁葺き屋根の小屋をつくり無料産院を開いた。

月25～45件あるお産の7割は、健診未受診の飛び込み。しかも、下痢や発熱などの急性症状から、高血圧、がん患者まで実に多様な患者が絶えず富田のもとにやってくる。病院は貧しいものの受け皿にならないのだ。

こんなエピソードがあった。結婚11年目に授かった赤ちゃん、妊娠7か月の深夜に陣発初診。子宮口はすでに全開大。急いで病院に救急搬送してすぐ小さな赤ちゃんは元気な産声をあげた。

貧しい人々とともに生きる覚悟と本当のやさしさ



富田 江里子 著

定価 1890 円(本体 1800 円+税 5%)

四六判/石風社/2013 年

ところが家族は治療費を集められなかった。赤ちゃんは冷房のよく効いた部屋にそのまま放置され、体温を失いやがて呼吸が止まった。自分のできる範囲を守ることは大切だ。それでも富田の胸には、病院でなくクリニックで生まれていたら、母親にずっと抱かせてあげたのに……という思いが去来する。

叶うことのない望みと残酷な結果、自分の無力さや絶望をつきつけられ祈るしかない現状、そんな過酷な毎日のなかで、富田は自分の役割を見出してゆく。失われる命をもっともな言いわけで見放すより、できる範囲で努力する。「今は誰がどう評価しようとそれでよかったと

確信する自分がいる」と富田は書いている。

富田の産院は、閉鎖の危機に何度もさらされてきた。8年前、息子とともに現地を訪れた私に、「クリニックがなくなっても、それは運命と受け入れ、この人が困ることはないだろう」と話してくれた。経済的にも楽でないはずだ。不自由も多いことだろう。それでも「自分にできることがある限り、道を求め続けようと思う」と、その場に留まりクリニックの運営を続ける富田に、大きなエールを送りたい。

生き抜いてゆく覚悟と、本当のやさしさとはどこから生まれてくるのだろうか。その答えがここにある。産科、助産に生きているものは、本書とゆっくりと向き合ってほしいと思った。